

## あざむかれた人びとの日

田 島 俊 郎

### La journée des Dupes

TAJIMA, Toshiro

#### Résumé

Malgré d'assez nombreux témoignages contemporains et tardifs, nous ne connaissons jamais les faits précis et exacts de la journée des Dupes. Nous trouvons des témoignages contradictoires ; pour la date elle-même, les historiens n'y consentent pas ; on hésite entre le 10 et le 11 novembre 1630 . Il en va de même pour les sentiments de Louis XIII et de Richelieu.

Mais ce qui nous frappe plus, ce n'est pas la divergence des témoignages mais plutôt la divergence de densité d'informations. Quelques témoins nous relatent avec minutie les paroles du cardinal de La Valette et de Saint-Simon. Pourquoi leurs paroles et actions, sont-elles rapportées si minutieusement ? Nous pensons que tous ces témoignages ne sont pas toujours si innocents, nous en avons sûrement certains qui sont faits soit pour embellir un personnage, c'est le cas de Saint-Simon, soit pour cacher la vérité.

主人の気持があなたに対してたかぶってもその場を離れるな。

落ち着けば、大きな過ちも見逃してもらえる。

『コヘレトの言葉』10-4 (新共同訳)

はじめに

ルイ 13 世の宰相としてフランスを絶対主義国家にしたリシュリユー (Armand Jean du Plessis, cardinal et duc de Richelieu) の権力は、まずマリ・ド・メディシス (Marie de Médicis) から与えられた。リシュリユーとマリ・ド・メディシスの関係をラ・ロシュフコーに聞こう。

フランス王妃マリ・ド・メディシスは、アンリ大王の妃にして、フランス王ルイ 13 世、フランス王子ガストン、スペイン王妃、サヴォワ公妃、イギリス王妃の母であった。彼女はフランスの摂政となり、長年にわたってわが子であるフランス王と彼の王国の上に君臨した。彼女はアルマン・ド・リシュリユーを枢機卿の高位に引き立て、宰相に任じ、国家と国王の精神の支配者たらしめた。彼女は人からおそれられるような美德も欠点もほとんど持ち合わせなかったが、にもかかわらず、故アンリ 4 世の妃にしてかくも多くの王たちの母であるこの后妃は、あれほどの栄華と権勢の後、わが子フランス王と、その栄達を彼女に負っているリシュリユー枢機卿の憎悪によって、捕らわれ、虜囚の身となった。彼女の子である他の国王たちも、自国に母君を受け入れることすら取立てせず、見捨てられた彼女は十年間の迫害の末に、ケルンでほとんど餓死に近い悲惨な死を迎えたのである<sup>1</sup>。

リシュリユーは、権力を獲得するための有力な庇護者でありながら後に最大の障害となったマリ・ド・メディシスを、1630 年 11 月 11 日、「あざむかれた人びとの日 (Journée des dupes)」とよばれる宮廷クーデタで排除する。この日母后マリ・ド・メディシスはリュクサンブール宮殿にルイ 13 世を招き、リシュリユーの罷免を迫る。ところが親子の面談に招かれないリシュリユーが加わる。この三者だけの面談には目撃し証言する者はいない。周囲は何があったのか想像することしかできない。様々な想像が回想録としてわれわれに残されている。本論では、このできごとについて回想録作家はどう想像しどう語ったか、なぜそれらの想像が語られたのか推論する。まず事件までの状況を述べる。続いて 1630 年 11 月 10 日 (11 日) のできごとについて、回想録の証言と歴史家たちの証言を比較・検証する。最後にわれわれの考察を述べる。

<sup>1</sup> ラ・ロシュフコー「考察」『ラ・ロシュフコー箴言集』岩波書店、1991 年、253-254 ページ。

## 状況

フランス国内では、大貴族は王権に対して半独立を保ち、武装したユグノー都市は国家内国家をなし、国家の統一は不確かである。ルイ 13 世に世継ぎができないままでは、王家の中の対立は、大貴族を巻き込んだ内乱になりかない。内乱は外国勢力の介入のいとぐちになりかねない。国際的にも、フランス対ハプスブルグ家の神聖ローマ帝国の関係は、直接戦火は交えないまでもイタリアやフランドル、ドイツ方面で緊張している。さらに三十年戦争が始まると、フランスはドイツの新教諸侯を支援し、スウェーデン王グスタフ・アドルフをドイツの戦場に引き入れようとしている。

リシュリユーの政界デビューは 1615 年の三部会である。フランス革命前の最後の三部会で頭角を顕し、マリー・ド・メディシスの秘書官に抜擢される。しかし出世の道は平坦ではなかった。マリ・ド・メディシスの立場が弱くなると、リシュリユーも庇護者に従わねばならない。最初の挫折は 1617 年であった。摂政マリ・ド・メディシスの側近であったアンクル元帥夫妻が殺されると、取り巻きは権力から遠ざけられる。マリ・ド・メディシスはプロワに引きこもることを強制され、リシュリユーもアヴィニョンへ追放される。アンクル元帥に代わって権力を握ったリュイヌ元帥の死によってマリ・ド・メディシスとリシュリユーはパリに戻る。1624 年からは宰相の地位について、権力の頂点に達したかのように見える。しかしその政策は王弟ガストン・ドルレアン、大貴族たちの利害と激しく対立し、マリ・ド・メディシスの支持を徐々に失っていく。

1628 年 12 月イタリアのマントーヴァ公の死が国際問題に発展する。フランスのヌヴェール公が領地の継承を主張。ことにカサーレ (Casale Monferrato) がポー川を望み戦略的な要衝であったため継承問題は公爵領の領有権争いからフランスと帝国 (スペインおよびオーストリア) のイタリアにおける優位を争う国際問題に発展した。フランス軍はイタリア情勢に介入することを決定。30 年

---

<sup>2</sup> アンクル元帥 Le Marechal d'Ancre, Conicini はフィレンツェ生まれ、1617 年 4 月 24 日アンクル元帥はルーブルの入り口で逮捕に抵抗しようとしたとして射殺され、死体は陵辱される。元帥夫人の Leonora Galigai は低い身分の生まれだったが、マリ・ド・メディシスの乳姉妹だったこともあり、侍従としてフランスに随行した。この翌月、魔女の嫌疑をかけられ処刑される。リシュリユーはアンクル元帥の引きで母後の側近になった経緯から、アンクル謀殺の黒幕であったリュイヌ (Luynes) に睨まれては肅清される可能性もあった。

初めにはリシュリユーとルイ 13 世もイタリアに入る。

ところが 8 月、リヨンに戻っていたルイ 13 世の腹中に腫瘍が腫れる。9 月 22 日にはルイ 13 世の病気が重篤化し、一時は崩御が噂された。ルイ 13 世崩御の際には、リシュリユーの失脚は間違いない。リシュリユーに反感を持つ重臣たちがマリ・ド・メデイシスの周囲に集まり、反リシュリユーの党派（カバラ）を形成する。

10 月初め、ルイ 13 世の病気は危険な状態を脱したが、病み上がりの王に母后はリシュリユーの罷免を求め、リシュリユーの失脚が近いとの噂が広まる。王は母后にパリに戻るまでの猶予を求め、ロアンヌからロワール川を下ってパリに向かう。母后は王の後を追う。リシュリユーは母后のために用意された船に同乗して許しを乞う。11 月初めにパリにたどり着いた母后はリュクスサンプル宮に入り、王も母后のもとに歩いていける距離にあった「特命大使の館」(Hôtel des ambassadeurs extraordinaires)に入る。リシュリユーに同船を許し融和的に見えた母后だが、王にさらにリシュリユーの罷免を求める。11 月 11 日、母后は人払いし王と二人きりでの面談を求める。求めるものはリシュリユーの罷免であった。

あざむかれた人びとの日

この日の様子をラ・ロシュフコーに聞こう。

ある日王は母后殿下と二人きりで閉じこもり、母后殿下は枢機卿に対する不満を繰り返し、枢機卿が国事に関わることに我慢がならないと宣言した。会話が白熱していたとき、枢機卿が入ってきた。母后殿下は枢機卿を見て怒りを抑えられなくなった。母后殿下は枢機卿が自らに対してなした忘恩と裏切りをなじり、自分の前に姿を見せることを禁じた。枢機卿は足元に身を投げ、服従と涙でなだめようとした。しかしすべては無駄で、決心はゆるがなかった。

枢機卿の不興の噂はすぐに広まった。枢機卿が完全に失脚したことを誰も疑わず、宮廷中が母后殿下の幻の勝利の分け前にあずかろうと母后殿下にお目見えするために押し寄せた。すぐに、王がこの日のうちにヴェルサイユへ行かれたこと、枢機卿が従ったことを知ると、みなこの旗幟の表明を後悔することとなる。枢機卿はヴェルサイユに行くべきかどうか迷っていたのだが、ラ・ヴァレット枢機卿が、王の見えないところにいてはいけぬ、身を守るためにはあらゆることを賭けるべきだ、と決心させたのだった。母后殿下も、

王とヴェルサイユに同行し、このような情勢の中では王をご自身の不安定な状態と枢機卿の技巧にさらしてはならない、と助言された。しかしヴェルサイユで退屈することと、まともな宿舎がないことへの懸念は、母后殿下には越えられない理由に見え、これほどに必要な意見を容れさせないことになったのである。枢機卿はこの機会を巧妙に利用することができ、王の心をつかみ、母后殿下の失脚に同意させた。母后殿下は間もなく逮捕され、その不幸は亡くなるまで続いたのであった。そのご不幸はよく知られているし、母后殿下の失脚は身分のある多くの方を巻き込んだこともよく知られている<sup>3</sup>。

ラ・ロシュフコーはこう伝えるが、このような大変動を引き起こした事件でありながら、当日の情報は混乱している。密室のできごとであり、残された証言は伝聞や推測によって書かれているからだ。あるいはリシュリユーによる情報操作もあったかもしれない。

リュクサンブールで3人はどう話し合ったのか。そもそも王と母後の面談にどうしてリシュリユーが入り込めたのか。王はどう答えたのか。その日の午後、母后は、リシュリユーを排除できたと考えていたのだから、リシュリユーの罷免を思わせるように振舞ったのかもしれない。リシュリユー本人は失脚したと考えていたのか、本気で逃亡しようと考えていたのか、それとも前もって王の真意を明かされていたのか、あるいは間諜によって特別な情報を得ていたのか。リシュリユーがヴェルサイユに行ったのは、王の指示によったものなのか、リシュリユーの意思によるものなのか、ラ・ヴァレットの助言に動かされたのか。ヴェルサイユでリシュリユーの権限を強化し反撃を決めたのは、王の発意によるものか、リシュリユーの働きかけによるものか。多くの証言にもかかわらず、事実は明らかではない。

回想録作家や歴史家たちは事件をどう伝えたか。最も曖昧な以下の点を比較検討する。まず、リュクサンブール宮殿での会談について、次に、リュクサンブール宮退出後のリシュリユーの言動、ことに逃亡・隠棲の意志を表明していたのか、ラ・ヴァレット枢機卿の助言はあったのか、そして、ルイ13世のお気に入りのもと小姓サン＝シモンに何らかの働きはあったのか。

#### 証言者たち

<sup>3</sup> La Rochefoucauld, p.45. 以下、特にことわらない限り拙訳による。

参照するのは以下の証言者たちの証言である。

リシュリユーには、『日録』(*Journal*)と『回想録』(*Mémoires*)がある。これらは著者名としてリシュリユーの名を冠してはいるが、実際はいずれもリシュリユー自身による執筆ではない。

同時代の現場近くにおいて記録を残したのは以下の人物たちである。

バスソンピエール (François de Bassompierre) は 1579 年生まれ、軍人としてプロテスタント諸都市との戦いで活躍した。ガストン・ドルレアンとの関連を疑われて 1631 年からバスティーユに閉じ込められる。釈放されたのはリシュリユーの死後であった。その『回想録』はバスティーユの中で書かれた。我が身が不利になることには沈黙している。1665 年に初めて公刊された。

ブリエンヌ (Henri-Auguste de Loménie de Brienne) は 1595 年生まれ、イギリス大使として、のちのチャールズ 1 世とアンリエット・ド・フランスとの婚儀をまとめた。のち外務卿をルイ 14 世の時代まで務めた。『回想録』は 1663 年の引退後に子供たちへの教訓として書かれた。最初に公刊されたのは 1717 年である。

フオートネ・マルイユ (François du Val, marquis de Fontenay-Mareuil) は 1595 年生まれ、リシュリユーが権力を握る前からその能力を評価し、リシュリユーとルイ 13 世の信任を受け、外交と戦争で活躍した。1630 年にはルイ 13 世のイタリア遠征に同行している。『回想録』は 1826 年まで印刷されていない。

ガストン・ドルレアン (Gaston d'Orléans) は、王の弟で王位継承者として様々な陰謀に担ぎだされる。ガストン・ドルレアンを著者とするメモワールはガストン自身の手になるのではなく、Algay de Martignac という人物の手になるのであろう。1683 年に最初にアムステルダムで発刊され、2 年後パリでも出版されている。

モングラ (François de Paule de Clermont, marquis de Montglat) は 17 世紀の初頭生まれの軍人で 1675 年死亡。1835 年から 1668 年までの回想録を残している。回想録は 1727 年に最初に印刷されている。『回想録』の中で自らのことを語らないので、本人の生涯についてはほとんどわからない。

さらに時間的・空間的にやや離れて事件を伝える人物たち。

ラ・ポルト (Pierre de La Porte, 1603-1680) は 1621 年以来、ルイ 13 世の王妃アンヌ・ドートリッシュに衣装係侍従として仕えたが、1625 年『三銃士』の題材になるバッキンガムが引き起こした事件の余波で追放される。のち復職するが、1637 年にはアンヌ・ドートリッシュによるスペインとの秘密通信に関与してバスティーユに投獄される。『回想録』は 1755 年に最初に公刊された。

ラ・ロシュフコーの父はリシュリユーに投獄されている。カサーレの戦いは軍人ラ・ロシュフコーの初陣であった。

オメール・タロン (Omer Talon 1595 年頃-1652) は、1613 年にはパリ高等法院の弁護士として働いている。タルマン・デ・レオには「脳みそが足りない」(homme de petite cervelle) と評価されている<sup>4</sup>。『回想録』は、実質的に 1631 年から 1652 年の高等法院の記録の抜粋である。家業を継いだ息子の Denis Talon によって補筆され、1732 年に出版された。

モットヴィル (Motteville) 夫人はのちアンヌ・ドートリッシュの侍従長になるが、まだこのころは若くまた宮廷から遠ざけられていた。

タルマン・デ・レオは 17 世紀前半の広範な人々の挿話を伝えこの社会の案内役ではあるが、この件に関してはモングラヤリシュリユーの『日録』を参照して伝えているのみで裏情報らしきものはない。

サン＝シモン (Louis de Saint-Simon) は 18 世紀の回想録作家で、同時代人ではないが、その父クロード・ド・サン＝シモン (Claude de Saint-Simon) は 1630 年当時ルイ 13 世の寵臣として王の傍に仕えていた。父は年の離れた息子に見聞を伝えたと言う。

#### リュクサンブール宮で

マリ・ド・メディシスは王以外の誰も入れないように命じていたのに、リシュリユーは入り込む。すでに王自身から母后には妥協する気持ちがないと知らされていたので、母后が王と二人きりであって王を押し切ることを警戒して、王妃の動向を監視していた。リュクサンブール宮の隣のプチ・リュクサンブール館に滞在していたリシュリユーには、王がリュクサンブール宮に入ればすぐにあとを追う用意はできていた。

#### フォントネ＝マルイユによると

「(母后はリシュリユーと和解するつもりはないと王から) 警告を与えられたことから、枢機卿は、親子が一緒にいらっしやる時にはいつも同席できるようにしようと決心した。そして王が母后に会われるのは主に朝だということを知っていたので、王が母后のもとに行かれる際には自分も行けるようにと注意していた。<sup>5</sup>

<sup>4</sup> Tallemant des Réaux, p.269.

<sup>5</sup> Fontenay-Mareuil, p.229.

親子の面談の場にリシュリユーがどう入り込んだか、証言者の言葉を聞いてみよう。

バツソンプイエールは、

お二方が議論していらっしゃる間に枢機卿が到着した。枢機卿は、寝室の前室の扉がとじていたので回廊に廻り、返事のない書斎の扉に到達したのだった。しまいには待つことに我慢できなくなり、建物の間取りはよく承知していたので、扉に鍵がかかっていたいなかった礼拝室から入った。<sup>6</sup>

フロントネ＝マルイユによると、

したがって翌日からそう（王が母后のもとに行かれる際には自分も行けるように）したのであった。しかし母后が命じられたとおり、扉が閉まっていて、だれも応えようとしなかったので、リシュリユーは裏口から入った。そちらでは門衛は枢機卿の入館を断る勇気がなかったのである。母后が最大の努力をしている瞬間に枢機卿が到着した。<sup>7</sup>

招かれていないリシュリユーが不意に現れ、王も母后も不意打ちを受けるが、マリ・ド・メディシスの動揺は大きく、感情を高め、ことばは激しくなる。その様子を回想録作者たちはほぼ同様に伝える。

モングラによると、

枢機卿が呼ばれもしないのに入りこみこう言った「私のことをお話でいらっしゃるようですが。」母后殿下は驚いて顔を赤らめ、枢機卿の忘恩をなじり、二度と現れぬよう命じられた。<sup>8</sup>

ラ・ロシュフコーによると、

会話が白熱していたとき、枢機卿が入ってきた。母后殿下は枢機卿を見て怒りを抑えられなくなった。母后殿下は枢機卿が母后殿下に対してなした忘恩と裏切りをなじり、自分の前に姿を見せることを禁じた。<sup>9</sup>

<sup>6</sup> Bassompierre, p.320.

<sup>7</sup> Fontenay-Mareuil, *loc. cit.*

<sup>8</sup> Montglat, p.59.

<sup>9</sup> La Rochefoucauld, *loc.cit.*



バッソンピエールはやや趣が違って、マリ・ド・メディシスのイタリア語風の主語代名詞を省略した言葉遣いやリシュリユーの高压的な態度を再現している。

枢機卿はこの驚かれた様子に気づいて言った「わたしについてお話しでしたね」。母后は「いいえ、してはおりませんでした」(Non faisons)と答えたが、それに対して「お認めください殿下」(Avouez-le, madame.)と答えたものだから、母后はそうと認め、それに重ねて枢機卿に対して大いに厳しく向かい、もう枢機卿を召使いたくはないなどと宣言した。<sup>10</sup>

王は母后の激昂に疲れ、母后に勝利を思わせるような言動をしたのかもしれない。モングラによれば「(王は) 枢機卿の姿を見なければ母后殿下の気持ちを落ち着かせるのに都合がよからうと言いながら、枢機卿に何日かの間(領地である) ポントワーズに謹慎するように」<sup>11</sup>と指示を与えた。もっともポントワーズ行きを王が指示したという証言は少ない。モングラ以外にはパリ駐在のトスカナ公使 Jean-Baptiste Gondi が伝えることによれば、「王が事態を調整するまでの数日間のポントワーズ行きを、王が提案した」としているが、同時に「王はリシュリユーをポントワーズに行かせずにヴェルサイユへ連れていった」<sup>12</sup>、と言っている。ポントワーズでの謹慎を示唆しながら、実際はヴェルサイユへ連れ去ったというこの記述では、母后の前での王の発言と行動が食い違っている。事件の結末を知ったあと、時間をはしょって伝えているのだろう。母后が勝利を思い込んだ程度には、リシュリユーの処遇は不明確だったのではないか。

モットヴィル夫人は、リシュリユーが到着する前に王がリシュリユー信任の兆候を示し、母后もそれを感じていたと述べている。

母后はこの提案に驚き憤慨して、息子王に対して激昂されました。涙を流し王を非難し、この戦いで勝利を得るために何もお忘れにはなりません。しかし目論見は成し遂げられるどころか、息子つまり判事が母后の敵方と通じていること、ほとんど敵の陣営にいることに気づかれました。<sup>13</sup>

<sup>10</sup> Bassompierre, *loc.cit.*

<sup>11</sup> Montglat, *loc.cit.*

<sup>12</sup> cité par Chavallier, p.388.

<sup>13</sup> Motteville, p.44.

しかし王の態度から王がリシュリユーを支持していると母后が気づいていたのであれば、母后支持派がこの午後リュクサンブール宮殿に参集した理由が考えにくい。王は立ち去るにあたって、母后に敗北を感じさせるような態度を表明していないはずである。母后と反リシュリユー派（カバラ）たちは勝利を確信し、リュクサンブール宮に集まり始めた。

リュクサンブール宮を退去して

この午後、リシュリユーは、王の信任を得てはいない、王の真意を図りかねていた、と回想録作者たちは考えている。バツソンプיעールは、リシュリユーは不安げな表情を見せていて、この日は領地であるポントワーズに出かけたと伝えている。

正午頃（バツソンプיעールは）枢機卿の館に行ったが、枢機卿はそこにはいなくて、ポントワーズに出かけたとのことだった。<sup>14</sup>

リシュリユーは馬車を用意させてはいたのだろうが、ポントワーズには出発していない。フロントネ=マルイユによれば、

枢機卿は非常に落ち込んで家に帰った。姪のコンバレ夫人と居合わせたブーティリエ氏にこれらのできごとを報告し、今夜はポントワーズにやすんでその後ル・アーブルに引きこもると言った。<sup>15</sup>

ラ・ロシュフコーによると「枢機卿はヴェルサイユに行くべきかどうか迷っていた」<sup>16</sup>し、モットヴィル夫人も「リシュリユー枢機卿はすべてを禁止され、すべてを捨てるべきか判断できかねていた」<sup>17</sup>と伝える。

リシュリユー自身による『回想録』の証言によると、王はリシュリユー支持を伝えている。リシュリユーはしおらしく身を引く許可を求めたが王は認めなかった、と言う。

<sup>14</sup> Bassompierre, *loc.cit.*

<sup>15</sup> Fontenay-Mareuil, p.230.

<sup>16</sup> La Rochefoucauld, *loc.cit.*

<sup>17</sup> Motteville, p.45.

陛下は、王がこれ程有用だとお感じになっていた奉公人を、母后殿下がどんな代償を払っても取り除きたいとお望みであるのを見て、母后をそのようなよからぬ企みを抱かせた者たちの悪意に対抗し、枢機卿を守ると決心され、母后に暇をこい、ヴェルサイユへ行かれた。枢機卿が母后の気分を害さないように身を引く許可を与えてくださるよういかに懇願しようとも、王は従うように命じられた。<sup>18</sup>

#### ラ・ヴァレットの助言

リシュリユーがルイ 13 世の支持を確信できず不安を抱えているときに、ラ・ヴァレット枢機卿(Louis de Nogaret de La Valette d'Épernon)が訪れ、リシュリユーを勇気づける。勝負を先に投げたほうが負けである。敵方にとっては不戦勝が最も有利な結末である。目を背けてはならない。王のあとを追い、これまでの功績の影響力を行使すべきだ、などなど。

同時代の証言者も、やや遅れて伝聞もしくは手稿を書き留めた証言者も、ラ・ヴァレット枢機卿の助言に言及している。

#### フォントネ=マルイユ

ラ・ヴァレット枢機卿がはっきりと反論したのは、(中略) 勝負から降りたら負けなのだということをよく思い出すように、母后殿下と敵たちに自由な余地や、彼らの好きなように反リシュリユーのことがらを言ったりしたりする手段を与えることほど、かれらにとって有利で都合の良いことはない。(中

<sup>18</sup> Richelieu, *Mémoires*, p.194. 先に述べたようにリシュリユー自身による記述ではない。したがって記述の視点がリシュリユーによるものだけではなく、他の視点に移ることもある。このすぐ後につづく段落では「国璽尚書は、母后が爆発されたとの噂と、枢機卿が暇を頂き、ポントワーズに休みにでかけたという自分の思い込みから、勝負に勝ったと思い、昼間のうちにヴェルサイユの近くの Glatigny に行った。夜、床に就くとき不愉快な知らせをうけとった。それは枢機卿は王とともにあり、王は枢機卿を歓待するにとどまらず、ご自身の寢室の真上の部屋で休まされたとのことであつた。そして朝、床を離れると、期待から外れていたのでさらに腹立たしい知らせを受け取った。」(*loc. cit.*) と、逮捕される国璽尚書マリヤックが、リシュリユーに対する王の思いがけない厚遇を知らされて驚く。リシュリユーがわざわざ政敵の視点で事件を語るとは、奇妙な『回想録』ではある。

略) ポントワーズではなく、ヴェルサイユに行くべきだ。<sup>19</sup>

#### ブリエンヌ

古い友人であるラ・ヴァレット枢機卿が先走った隠棲に反対し、勇気を失ってはならない、ヴェルサイユへ王に会いに行つて、才能とこれまでの奉仕が王の精神に与えてきた影響力をこの機会に行使すべきだと忠告した。<sup>20</sup>

ガストン・ドルレアンは、王の顧問会議議長のシャトーヌッフも助言したとする。

ラ・ヴァレット枢機卿とシャトーヌッフ氏の意見と忠告によって勇気づけられた枢機卿は、即座にヴェルサイユに仕候した。<sup>21</sup>

#### モングラ

ラ・ヴァレット枢機卿が到着し進言した。王の目の届くところから出ない注意を怠らぬように、というのは王がどんなことばをかけられたにせよ、あなたの姿が見えなくなればそんなものは容易に忘れてしまわれるし、母后殿下や敵たちに囲まれていらしたらあなたの帰還を許されることはないのだから、そうなる方策が尽きたことになりましょう。暇乞いと口実でヴェルサイユに行かれるべきだ。<sup>22</sup>

少し時間をおいた回想記作者たちもラ・ヴァレットの役割に言及する。

#### ラ・ポルト

枢機卿は陛下にあえて従われなかったのだが、ラ・ヴァレット枢機卿が勝負から降りるのはよろしくないと言ったものだから。枢機卿はそれに同意した。<sup>23</sup>

#### ラ・ロシュフコー

<sup>19</sup> Fontenay-Mareil, *loc.cit.*

<sup>20</sup> Brienne, p.52.

<sup>21</sup> Gaston d'Orléans, p.78. シャトーヌッフはかつてモンモランシー公の小姓だったことがあるが、2年後のモンモランシーに死刑判決を下す役回りが回ってくることになる。モンモランシーを反乱に引き込んだガストン・ドルレアンにとっては、この名は心地良いものではないのかもしれない。

<sup>22</sup> Montglat, *loc.cit.*

<sup>23</sup> La Porte, p.12.

ラ・ヴァレット枢機卿が王の見えないところにはいけない、身を守るためにはあらゆることを賭けると決心させたのだった。<sup>24</sup>

#### モットヴィル夫人

リシュリュー枢機卿はすべてを禁じられ、すべてを捨てるべきか判断できかねていたが、ラ・ヴァレット枢機卿の助言に従って王のあとを追い、この機に、その場に居ることが、ほんのわずかの時間、数時間で王の心を支配した利点を器用に活用した。<sup>25</sup>

いずれも伝聞の証言である。一般的に流布していた噂を書き留めたものだろうか。それとも親本から派生していった引用によるものなのか。フォントネ＝マルイユの「勝負から降りたら負け」(qui quitte la partie la perd) や、ラ・ポルトの「勝負から降りるのはよろしくない」(il a grand tort de quitter la partie.) のように同じ表現を伝えているのは、ラ・ポルトがフォントネ＝マルイユを参照しているのか、あるいは共通の伝聞を別個に書き留めたのだろうか。

異色なのはオメール・タロンの証言で、サン＝シモンに言及する。

この(ヴェルサイユへの)小旅行に枢機卿は従い、ラ・ヴァレット枢機卿の助言と王のお気に入りだったサン＝シモン氏の機転に決意を固め、彼らは王のお気持ちをひっくり返した。王は国璽尚書のマリヤック氏を逮捕させ後任にシャトーヌッフ氏を、同時に顧問会議議長にル・ジェ氏を据えた。<sup>26</sup>

ラ・ヴァレット以外にサン＝シモンの名前が出てくる。このサン＝シモンの機転とは何か。

#### サン＝シモンの役割

クロード・ド・サン＝シモンはルイ 13 世の寵臣であった。ルイ 13 世はお気に入り身を身近に置いたが、サン＝シモンは、リュイヌ元帥よりあと、サン＝マール(Cinq-Mars サンク＝マルス)より前の寵臣であった。サン＝シモンが 68 歳の時にもうけた三男が回想録作家ルイ・ド・サン＝シモンである。ルイ・ド・

<sup>24</sup> La Rochefoucauld, *loc. cit.*

<sup>25</sup> Motteville, *loc. cit.*

<sup>26</sup> Omer Talon, p.2.

サン＝シモンはその浩瀚な『回想録』の中で、この事件における父親の果たした役割についてほのめかしている。

父から知らされた多くのことがらを（中略）いくつか一般的に注目されていることがらを語ることで満足しよう。父がリシュリュー枢機卿の運命を手に行っていたあのあざむかれた人びとの日にも目を止めないようにしよう。<sup>27</sup>

事件後 60 年を経た 1690 年よりあとに書かれたこのほのめかしの意味は、さらに 60 年後にグリッフェ神父によって明らかにされる。イエズス会士の歴史家グリッフェ神父 (Henri Griffet) は 1758 年刊の『ルイ 13 世時代史』(*Histoire du Règne de Louis XIII*) で、ルイ・ド・サン＝シモンへの取材に基づき事件の筋立てを構成している。グリッフェは各種回想録や今は散逸した手稿を参照しているが、そんな中に、未刊行のルイ・ド・サン＝シモンの『断章』<sup>28</sup>もあった。『断章』は 1834 年まで印刷公刊されていない。

サン＝シモン父は、マリ・ド・メディシスが激昂する場に立会っただけでなく、リュクサンブール宮を退出したあと、王の宿舎で王に意見を申し述べたという。

（王は）寵臣に意見を求めた。寵臣は疑いを引き起こしかねないので枢機卿を支持するとはっきり表明すると見せることなく、枢機卿の企てはこれまですべてうまく行って、枢機卿の替りとして母后が提案した者たちはみな才能と能力に置いて遙かに及ばないと王に思い起こさせた。<sup>29</sup>

さらにサン＝シモン子の『断章』によると、サン＝シモン父は、リシュリューをヴェルサイユへ呼び寄せるべきだと進言したとする。

ついに王は決心された。父は（中略）王が決然としていらっしゃるのを見てこう申し述べた。王がリシュリュー枢機卿への信任を続け、用い続けると決心されたのであれば、本人にそう伝えることをおろそかになさるべきではありません。なぜなら今朝のリュクサンブール宮で起こったことのアとで枢

<sup>27</sup> Saint-Simon, *Mémoires*, Pléiade, p.62.

<sup>28</sup> Saint-Simon, *La journée des Dupes, fragment historique de Saint-Simon*. 以下『断章』と呼ぶ。

<sup>29</sup> Griffet, p.65.

機卿がおかれた状態や状況で、王からの何の知らせもなければ、枢機卿が即座の引退の決心をしても不思議ではございませんので。

王はこの考えを了とされ、今夜ヴェルサイユに会いに来るよう王からの達しである、と枢機卿に伝えよと父に命じられた。<sup>30</sup>

サン＝シモン父が王に進言し、王の意見を支配し、まさに「リシュリユー枢機卿の運命を手にしてきた」ような記述である。さてこの記述はどれほど信用が置けるのだろうか。

サン＝シモン子の記述は詳細であるが、伝聞である。聞き書きは事件後 60 年ほど経っている。『回想録』の最初の執筆開始は 1694 年である。『回想録』には含まれないこの『断章』も 1694 年前後の執筆だったとすると、1607 年生まれの 80 歳を過ぎた父が、1675 年生まれのまだ十代の息子に語っている。『回想録』や『断章』の執筆は父の死後に始めるので、さらに何年かを過ぎている。サン＝シモン子が『回想録』執筆を始めたのは、バツソンプיעールなどの『回想録』を読んで触発された<sup>31</sup>、と言っているので、すでに知っている筋書きの中に父を据え、重要な役割を振ったのだろうか。グリッフェ神父は 1754 年にサン＝シモン子が語ったのを聞いたと述べているが、事件から 120 年以上前の事件の伝聞でありながら奇妙に詳細な証言である。120 年後の伝聞による詳細な証言は信用できるだろうか。

### 歴史家たち

18 世紀以降のこの事件に触れた主だった歴史家たちの記述を参照する。参照するのは、18 世紀のグリッフェ神父 (Henri Griffet)、19 世紀のミシュレ (Jules Michelet) とトパン (Marius Jean Topin)、20 世紀のモングレディアン (Georges Mongrédien)、シュヴァリエ (Pierre Chevallier) とプティフィス (Jean-Christian Petitfils) である。

グリッフェ神父はサン＝シモン子を情報源として使っていることから明らかのように、サン＝シモン父の活躍を伝えている。

ミシュレの意見はミシュレ独特の脚色が入っていて、ミシュレ自身の語りを

<sup>30</sup> Saint-Simon, *La journée des Dupes*, p.502. Mongrédien, p.80. も再録している。

<sup>31</sup> Saint-Simon, *Mémoires*, p.186. 参照

楽しみたくなる。例えば11月11日の場面では、「母后は怒りをルーベンスの回廊に巡らしていた」とどの回想録に言及されていないルーベンスに言及する<sup>32</sup>。ミシュレは、リシュリユーの強韌さは間違いなのだからラ・ヴァレットの勇気付けについては疑わしい、連絡者としてサン＝シモンを想定しているが、控えめなぼんやり者の役割しか振っていない<sup>33</sup>。さらにリシュリユーがルイ13世を説得する内容までも述べる。

トパンは、ルイ13世が最初からリシュリユーを信任していたと考えている。トパンにとってこの事件の興味深い点は、ルイ13世がリシュリユーを信任していたかどうかにある。トパンはリシュリユーの性格を、大胆ながら自分のことになると臆病であり、高みに登れば登るほど落ちることに対する恐怖感を強く感じた、と言う。この事件で重要なのは王の意志であり、トパンはサン＝シモン証言とグリツフェ神父の記述を信用して、王はリシュリユーを信任し続けていたとする。

モングレディアンはトパンの意見には与しないが、サン＝シモンの証言を採用する。モングレディアンは回想録作家たちの証言を集め、われわれにとって貴重な道しるべを提供してくれているのだが、次のシュヴァリエに資料調査の不備と誤認を指摘される。

シュヴァリエは、これまでの証言者や歴史家たちの日付に関する矛盾を整理して、事件は11月10日のサン＝シモン父を含む多くの人々の前での場と<sup>34</sup>、11日朝の王親子とリシュリユー三者の場に整理し、11日にサン＝シモン父は立ちあっていないとする。サン＝シモン父が「リシュリユーの運命を手にする」ことはなかったということである。またラ・ヴァレットの助言についても、事実とは見なさない。

プティフィスはシュヴァリエの説に従う。プティフィスによれば、ルイ13世

---

<sup>32</sup> ルーベンスの『マリ・ド・メディシス一代記』は、今はルーブル美術館で見ることができる。

<sup>33</sup> Michelet, p.67-68.

<sup>34</sup> 本論では触れていないが、母后がリシュリユーの姪であり侍従のコンバレ夫人に暇を申し渡す場面がブリエンヌやモットヴィル夫人の証言で報告されている。ことにモットヴィル夫人では、コンバレ夫人追放の場面と三者の面談が、1つの幕(acte)で登場人物だけ変わった別の2つの場(scène)なのか、場所と時間も異なる2幕なのか、曖昧である。モングレディアンはこれらできごとを11月10日の一幕だけと考えたが、シュヴァリエはこれらを10日の幕と11日の2幕に整理し、サン＝シモン父は10日の1幕のみの登場人物だとする。



を偉大な父（アンリ 4 世）と偉大な息子（ルイ 13 世）に挟まれ、偉大な宰相（リシュリユー）に影が薄い王だが、リシュリユーが王を操ったのではなく、リシュリユーを操った有能な王だったと言う。

### 情報操作

サン＝シモンの証言は事件後 60 年以上経ってからの聞き書きでありながら奇妙に詳細なのだが、信用するに値するだろうか。同時代の回想録作者たちにはほとんど言及されていないことも奇妙である。サン＝シモン父が息子に語るときに、自分の活躍を創作して付け足したのかもしれない。サン＝シモン子の記述はフォントネ＝マルユに似ていないだろうか。バツソンプィエールなどの筋書きの中に、息子が父を「活躍」させたのかもしれない。

サン＝シモンは 1630 年当時、小姓から小厩舎の長（Premier Ecuyer du Roi）に取り立てられ、王の傍に控えていたことは間違いない。あちこちに秘密エージェントがいた事も間違いない<sup>35</sup>。サン＝シモンはリシュリユーのスパイだったのか。サン＝シモンの活躍が親か子の創作であれば同時代の回想録は言及しようがない。仮に事実であっても、スパイ本人がふれ回るはずはない。もちろん、リシュリユー側が言及するはずもない。カードの中身を覗き込んでいたと自分から告白する必要はない。

情報を攪乱させて真実を見えにくくしていたほうが、政治はやりやすいだろう。リシュリユーが情報を攪乱する手段をとったことは間違いない<sup>36</sup>。

---

<sup>35</sup> リシュリユーが 11 日の王と母后面談の場にたどり着く扉を開けた人物はマリ・ド・メディシスに仕えていた Claire de Bricet, Zocoli（あるいは Zuccole）というイタリア人と結婚したフランス女性で、リシュリユーの手の者だったのだろう。数日後母后から暇を出されている。Chevallier, p.387. および Siri, p.238-239. 参照。

<sup>36</sup> マリ・ド・メディシスもリシュリユーの情報攪乱術を承知していた。リシュリユーを評して言う、「母后殿下は答えた、そんなことでは驚きません、あれはその気になったときに泣けるのですから、と。（中略、またあるものが）母后殿下に、枢機卿がその人とは思えぬほどやつれて様変わりされたと伝えると母后殿下は、あれは好きなように姿を変えられるのです、陽気そうに見えた一瞬後には半ば死んだように見えるたものです、と言った。」（Talemant des Réaux, p.241-242.）これらの記述はリシュリユーの *Journal* から引用されている。*Journal* はリシュリユーの秘密エージェントの報告に加筆して編まれているので、つま

リシュリユーの居室は王の居室や王母の居室よりずっと私的で内密な空間である。そういった密室でのラ・ヴァレットの重大な発言が多く、『回想録』に引用されている。しかもう一つ奇妙なことに、引用者たちは目撃者が誰なのかは述べない。誰が見聞きし伝えたのかわからない発言が、事実であるかのように詳細に流布している。証人が明確にされないまま繰り返し引用されるラ・ヴァレットの発言の役割はなんだろうか。サン＝シモンの場合のようにラ・ヴァレットの手柄を美化するためではあるまい。ラ・ヴァレットの助言の場面は、リシュリユーの能力を過小に見せかける偽情報だったのではないか。リシュリユーが、反リシュリユー派（カバラ）の戦略も王の真意もすべて承知して、敵たちを踊らせることは大いにありそうである。しかし謀略による権力獲得は権力の篡奪者と思われかねない。とすると、「あざむかれた人びと」と同様に、リシュリユーも王の真意を承知していなかった、と情報操作することはありうるのではないか。

#### おわりに

本論では、「あざむかれた人びとの日」と呼ばれる、1630年11月10日から12日にかけて起きたリュクサンブール宮殿での宮中クーデタについての回想を比較し考察した。「あざむかれた人びとの日」について、証言者たちの証言から、11月11日のルイ13世、母后マリ・ド・メディシス、宰相リシュリユーの三者の対決の場面、会談が決裂したあとのリシュリユーの進退、リシュリユーの進退を決定づけるために果たしたかもしれないサン＝シモンとラ・ヴァレット枢機卿の役割について検討した。サン＝シモン父もしくは息子が歴史を再構成して述べているように、リシュリユーもずっと巧妙に歴史を作ったのではないか。

(2010年9月30日)

## 書誌

## 証言者

- BASSOMPIERRE, François de, *Mémoires du maréchal de Bassompierre*, dans Nouvelle collection des mémoires pour servir à l'Histoire de France depuis le XIIIe siècle jusqu'à la fin du XVIIIe, précédés de Notices pour caractériser chaque auteur des mémoires et son époque; suivi de l'Analyse des Documents historiques qui s'y rapportent. par MM. Michaud et Poujoulat. tome 6e, Paris, l'éditeur du commentaire analytique du code civil, 1837. (<http://books.google.com/books?id=Zt4TAAAYAAJ>)
- FONTENAY-MAREUIL, François du Val, *Mémoires de Messire François Duval, marquis de Fontenay-Mareuil*, dans Nouvelle collection des mémoires pour servir à l'Histoire de France depuis le XIIIe siècle jusqu'à la fin du XVIIIe, précédés de Notices pour caractériser chaque auteur des mémoires et son époque; suivi de l'Analyse des Documents historiques qui s'y rapportent. par MM. Michaud et Poujoulat. tome 5e, Paris, l'éditeur du commentaire analytique du code civil, 1837. (<http://books.google.com/books?id=Yt1AAAAAcAAJ>)
- Gaston, duc d'Orléans, *Mémoires, contenant ce qui s'est passé en France de plus considérable depuis l'an 1608 jusqu'en l'année 1636*, Clermont-Ferrand, Paléo (Sources de l'Histoire de France), 2004, 2-84909-062-X.
- LA PORTE, Pierre de, *Mémoires de P. de la Porte, premier valet de chambre de Louis XIV, contenant plusieurs particularités des règnes de Louis XIII et de Louis XIV*, dans Nouvelle collection des mémoires pour servir à l'Histoire de France depuis le XIIIe siècle jusqu'à la fin du XVIIIe, précédés de Notices pour caractériser chaque auteur des mémoires et son époque; suivi de l'Analyse des Documents historiques qui s'y rapportent. par MM. Michaud et Poujoulat, tome 8e, Paris, l'éditeur du commentaire analytique du code civil, 1839. (<http://books.google.com/books?id=g9hAAAAAcAAJ>) et aussi une version moderne chez Paléo. *Mémoires 1624-1666*, Clermont-Ferrand, Paléo (Sources de l'Histoire de France), 2003, 2-84909-043-3.
- LA ROCHEFOUCAULD, François de, *Mémoires* dans *Œuvres*, édition établie par L. Martin-Chauffier, revue et augmentée Par Jean Marchand, Paris, Gallimard (Pléiade), 1986, 2-07-010301-3.
- ラ・ロシュフコー著、二宮フサ訳、『ラ・ロシュフコー箴言集』、岩波書店、1991年
- LOMENIE DE BRIENNE, Henri-Auguste de, *Mémoires du comte de Brienne, ministre et secrétaire-d'état, contenant les événements les plus remarquables du règne de Louis XIII, et ceux du*

- régné de Louis XIV jusqu'à la mort du Cardinal Mazarin*, dans Nouvelle collection des mémoires pour servir à l'Histoire de France depuis le XIIIe siècle jusqu'à la fin du XVIIIe, précédés de Notices pour caractériser chaque auteur des mémoires et son époque; suivi de l'Analyse des Documents historiques qui s'y rapportent. par MM. Michaud et Poujoulat, tome 3e, Paris, l'éditeur du commentaire analytique du code civil, 1838, (<http://books.google.com/books?id=snUNAAAAIAAJ>)
- MONTGLAT, François de Paule de Clermont, *Mémoires de François de Paule de Clermont, marquis de Montglat*, Paris, Foucault, 1825 (dans la collection des mémoires relatifs à l'Histoire de France, depuis l'Avènement de Henri IV jusqu'à la paix de Paris conclue en 1763; avec des notices sur chaque auteurs, et des observations sur chaque ouvrage, par M. Petitot, Tome XLIX) (<http://books.google.com/books?id=Nc4FAAAAQAAJ>)
- MOTTEVILLE, Françoise Bertaut de, *Mémoires de Mme de Motteville sur Anne d'Autriche et sa cour, nouvelle édition d'après le manuscrit de Conrart avec des éclaircissement et un index par F. Riaux et une notice sur Mme de Motteville par Sainte-Beuve*, Paris, Charpentier, 1855. ([http://books.google.com/books?id=Afc\\_AAAAaAAJ](http://books.google.com/books?id=Afc_AAAAaAAJ))
- RICHELIEU, Armand Jean du Plessis, *Journal de monsieur le Cardinal duc de Richelieu, qu'il a fait le grand orage de la court, ès annès 1630 à 1644, Tiré des Mémoires qu'il a escrits de sa main, dans Archives curieuses de l'Histoire de France depuis Louis XI jusqu'à Louis XIII*, 2e série, tome 5, Paris, Beauvais, 1838, (<http://books.google.com/books?id=KP0TAAAAQAAJ>)
- RICHELIEU, Armand Jean du Plessis, *Mémoires*, tome XI (août 1630-mai 1631), La Journée des dupes, Clermont-Ferrand, Edition Paleo, (Sources de l'Histoire de France), 2006, 2-84909-202-9
- SAINTE-SIMON, Louis de Rouvroy, *Mémoires (1691-1701)*, édition établie par Yves Coirault, Paris, Gallimard (Pléiade), 2002, 2-07-010958-5
- SAINTE-SIMON, Louis de Rouvroy, *La journée des Dupes, fragment historique de Saint-Simon*, appendice IV de l'édition de Boislisle, Paris, Hachette, 1879. Mongrédien reprend le texte, p.200-203. et p.78-81.
- SIRI, Vittorio, *Anecdotes du Ministère du cardinal de Richelieu et du règne de Louis XIII avec quelques particularitez du commencement de la Régence d'Anne d'Autriche, tirées et traduites de l'italien du Mercurio de Siri*, Paris, Jean Muzier, 1717, (<http://books.google.com/books?id=7YdAAAAaAAJ>)
- TALLEMANT DES REAUX, Gédéon, *Historiettes I*, édition établie et annotée par Antoine Adam, Paris, Gallimard (Pléiade), 1990, 2-07-010547-4.
- TALON, Omer, *Mémoire de Omer Talon*, dans Nouvelle collection des mémoires pour

servir à l'Histoire de France depuis le XIIIe siècle jusqu'à la fin du XVIIIe, précédés de Notices pour caractériser chaque auteur des mémoires et son époque; suivi de l'Analyse des Documents historiques qui s'y rapportent. par MM. Michaud et Poujoulat., Paris, Paris, l'éditeur du commentaire analytique du code civil, 1839.

(<http://books.google.com/books?id=9KsFAAAAQAAJ>)

## 歴史家

BERTIERE, Simone, *Les reines de France au temps des Bourbons, les deux régentes, Marie de Médicis, Anne d'Autriche*, Paris, Fallois, 1996.

CHEVALLIER, Pierre, *Louis XIII, roi cornélien*, Paris, Fayard, 1979

GRIFFET, Henri, *Histoire du règne de Louis XIII, roi de France et de Navarre*, tome second, Paris, Chez les Libraires Associés, 1758. (<http://books.google.com/books?id=GZEPAAAAQAAJ>)

MICHELET, Jules, *Richelieu et La Fronde, Histoire de France au dix-septième siècle*, Paris, Chamerot, 1858, (<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k5852061m>)

MONGREDIEN, Georges, *La Journée des Dupes, 10 Novembre 1630*, Paris, Gallimard, 1984, (Trente journées qui ont fait la France)2-07-024540-3

PETITFILS, Jean-Christian, *Louis XIII*, Paris, Perrin, 2008.

TOPIN, Marius, *Louis XIII et Richelieu, Etude accompagnée des lettres inédites du Roi au Cardinal Richelieu*, Nabu Public Domain Reprints, 2010, (reprint de l'édition de Paris, Didier, 1876)